

作成日：2020年5月28日

作成者：大河原健太郎（慶應義塾大学政策メディア研究科 D3 年）

湘南藤沢学会 研究助成金（研究成果発表）成果報告書

概要

タイトル：Dilemmas on Lithuanian Energy Issues: From the Aspect of Nuclear Energy

| 1

学会：IAFOR ACSS 2020

（The International Academic Forum, The 11th Asian Conference on the Social Sciences）

参加期間：2020/05/24-2020/05/27

形態：録画ビデオによるバーチャル参加

<https://acss.iafor.org/acss2020/>

活動内容

今回発表した“Dilemmas on Lithuanian Energy Issues: From the Aspect of Nuclear Energy”は、申請者が学部生時代に執筆した卒論を基にしている。本研究は、リトアニア共和国の原発政策の変遷を複数次元の「ジレンマ」という観点/理論枠組みから分析したものである。

リトアニア共和国は東欧/北欧に位置するバルト三国の一国で、旧ソ連から独立を回復して以来30年ほどが経過している。この国はかつて原発保有国の一つであり、現在は一件の新規原発建設プロジェクトが計画上にある。

本研究で披露した知見は以下の通りである。

1. 建設プロジェクトは凍結・再凍結を経て、事実上の計画断念に追い込まれている。
2. リトアニア国民は、そのアパシー的性格などにより、「反原発」とは言い切れない。
3. リトアニア原発事情は激しい流動性と変遷するジレンマ的性格により、稀有かつ学術上重要な意義を持つ。

実際の発表内容については <https://vimeo.com/iafor/56794> 並びに公式プログラム 44 頁 <https://issuu.com/iafor/docs/acad-programme-2020> を参照。

得られたこと（成果の活用）

作成日：2020年5月28日

作成者：大河原健太郎（慶應義塾大学政策メディア研究科D3年）

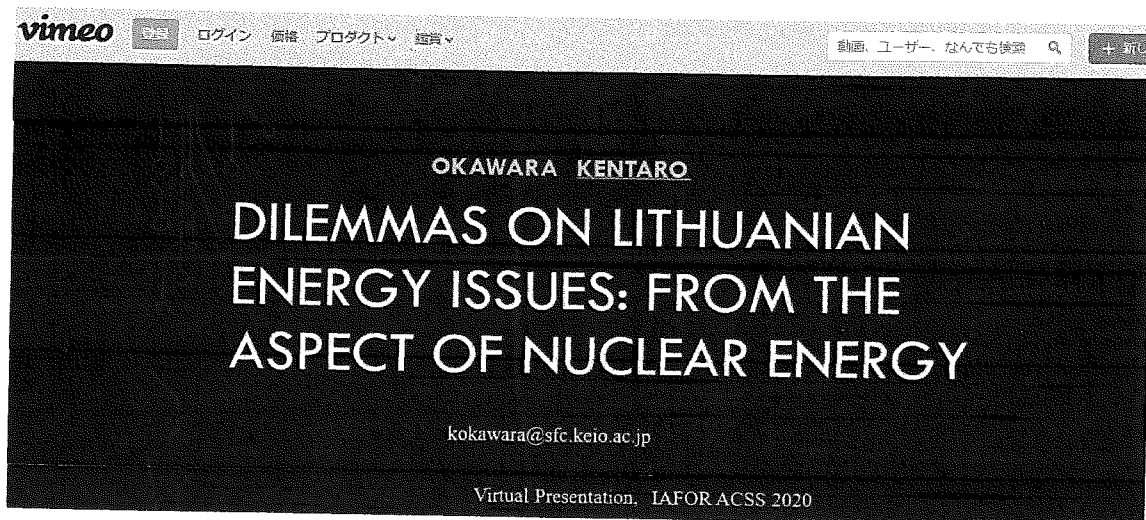
現在私はバルト地域・旧ソ連地域を歴史認識論という枠組みから研究している。歴史認識論は、現代政治学の知識のみならず社会学史学文学等様々なディシプリンの観点が必要とされる、非常に学際的な学問である。様々なバックグラウンドを有する参加者より有益な意見を得られたことで、博論に向けた枠組み作りや研究の計画作りがより精緻になったと感じる。

| 2

反省（成果を踏まえて）

申請者はこれまで、GIGA 授業（英語で行われる学部生授業）の TA を務める/学部生時代に国際的学術交流イベントに派遣されるなど、英語で学術的アクティビティに参加する機会は数々あった。それでもなお、すべての資料を英語で用意し、なおかつ英語のみでスピーチをするという体験は中々に挑戦的であった。また、20分程度で研究の骨子をすべて過不足なく説明すること自体、十分な準備が無ければ難しいと感じた。

今回は3月下旬から準備を行ったが、おそらくもっと準備期間を設けるべきだっただろう。次回（ICCEES 2021、カナダ・モントリオール大会）の学術発表ではよりクオリティの高い発表をしたい。



× アップロード、ライブストリーム、自分の動画作成をすべてHDで。

ログイン

Vimeoに登録

<https://vimeo.com/419800541>. 発表ビデオのキャプチャ。